

役割語としての「軍隊語」の起源

衣畑 智秀
楊 昌 洙

一 役割語としての「軍隊語」

柳家金語桜の落語「兵隊」に、次のような一節がある。

すると、後で、だれやら“オイオイ”と私を呼ぶ声がいたしました。見ると、南無三！上等兵だ！！

上等兵「オイ、だれだ、そこにいるのは、だれだ！」

金「ハッ、ハッ……」

上「だれだッ」

金「自分であります」

上「自分ではわからん！だれだと聞いてるんだ」

ここでは、名前もしくは身分を問われた金語桜が、名前を名乗らずに、代名詞を使っている。代名詞は固有名詞と違い、使う人が誰であっても同じ言葉になるので、その人物の身分を割り出すことができないため、笑いを誘うものとなっている。また、代名詞「自分」が、「兵隊」をすぐに連想させる語であることも、滑稽味を加えているといえるだろう。度を過ぎた「兵隊らしい答え方」というものが、「自分であります」には読み取れるのである。

このような兵隊言葉に対するイメージは、太宰治のエッセイにも

見られる（斎藤理生氏の御教示による）。

私が夜おそく通りがかりの交番に呼びとめられ、いろいろうろさく聞かれるから、すこし高めの声で、自分は、自分は、何々であります、というあの軍隊式の言葉で答えたら、態度がいいとほめられた。 「一步前進二歩退却」

太宰は軍隊経験がないと思われるので、この件から直接軍隊を経験していなくても、軍隊語に対するイメージをもっていたことが分かる。

さて、「兵隊」や「一步前進二歩退却」は、戦争を経験した世代の人間によるものであり、彼らは、リアルタイムで、軍隊、軍人と接していたとも考えられる。しかし、「自分は……であります」といった語法は、日本の軍隊を直接知らない人達でも、「知っている」のではないだろうか。次に引用した『光る風』という作品の作者山上たつひこ氏は、戦後の生まれであり、また、この作品は「七〇年の時点で日本の最も無惨な未来図を描いた名作」（ちくま文庫裏表紙）と評されているように、登場しているのは、いわば架空の軍隊（厳密には国防隊と言われ、自衛隊が発展したものを感ぜさせる）である。ここから、「自分は……であります」は現実を越え、役割語としての「軍隊語」となっていることが分かる。

天勝 「おまえ以前にいったことがあったな「大尉殿のためなら

どんな命令でもいとません！」——と

船田 「はいもうしあげました」

天勝 「いまでもおなじことがいえるか？」

船田 「もちろんであります 自分は——」

天勝 「よし—— それならいい」

船田 「しかし… それがどうかしたのでありますか」

このような言葉の上の戦略を使っているものとして、『機動戦士ガンダム』についても見ておこう。ガンダムでは、「自分」が使われることはないが、「であります」がジオン軍に限って用いられている。これによって、連邦軍が、読者にとってもなじみやすいのに対して、ジオン軍がその独裁的で、堅苦しい与えることに成功していると考えられる。

「サイド7は、開拓が始まってどのくらいたつのかな？」

「二年半ほどであります。シヤア大佐」

十歳も年上のドレン中尉が懇懇に答えた

……中略……

「V作戦か。地球連邦軍め、モビルスーツを完成させたな」

「モビルスーツ？連邦が、でありますか？」

シヤアは、疑い深そうに応じるドレン中尉の鈍さが癪にさわった。文官上がりだから仕方あるまい。

「サイド7に軍は駐留しているのか？」

「おります。コロニー管理省の部隊が一小隊。パトロール第三方面軍の第八中隊であります。二か月前の情報であります。」

二 軍隊語の実態を探る

以上、「自分」や「であります」といった「軍隊語」が役割語として定着しているのを見てきた。では、実際の軍隊ではどうだったのだろうか。もちろん我々は、直接に軍隊語を観察することはできないが、ここでは、戦争経験者の書いた資料に当たることにより、軍隊語の実態と言えるものを推測してみよう。

まず、「自分」についてであるが、次のように見られる。

貴公は、すまんが、中隊長に報告をたのむ。自分は小隊と一緒に残る。それからすぐ担架を—— 「呉淞クリーク」

自分は戦争に來ているのですから、死ぬのは当然ですが、内地が爆撃されたり、焼けてしまったら、まったく犬死のような気がします。 「山中放浪」

伍長殿、自分は昨夜この近藤一等兵と一緒に酒を飲んで居た者

一 日比野士郎。昭和一二（一九三七）年、応召、上海戦線で呉淞クリーク渡河に参戦して負傷、内地送還。

二 今日出海。昭和十六（一九四一）年に徴用、陸軍報道班員として南方に従軍。一九（一九四四）年比島で敗走する日本軍に従い九死

であります。証人として一緒に参りたいと思ひますが、どう
せうか
「生きている兵隊^三」

「呉淞クリーク」は、作者の実体験に基づいた小説である。こ
こで使われている「自分」は、「たのむ」という言葉からも分かるとお
り、特に目上の人に対して使われたものではない。この作品では、
これ以外に「自分」は見られない。一方、「山中放浪」「生きている
兵隊」の「自分」は目上の者に対するセリフである。とくに「生き
ている兵隊」では、「であります」もセットで使用されており、先に
見た我々のイメージに合うものである。

このように、確かに「自分」という代名詞は、戦争文学と言われ
る作品、特に作者が戦争の現場に行ったものに見られる。しかし、
軍隊であれば必ず「自分」を使うというわけではなく、実際は、「自
分」という代名詞が全く見られない小説も多い。

「自分」を使わないもの一つに、海軍での一人称がある。海軍
では「自分」を使用せず、「私（わたくし）」を使用していたとい
う実態が考えられる。

いいえ。みんな張り切っております。ことにこんどの台湾沖航
空戦の大戦果を聞いてから、この勝に乗じた時期に、私たちが
はやく技術をマスターして、空母と刺しちがえに出て征きたい

に一生を得て帰還。

三石川達三。昭和一二（一九三七）年、中央公論社特派員として中
支方面へ戦線視察。

とおもっています。

「雲の墓標^四」

「雲の墓標」の作者阿川弘之氏は、対談^五で次のように述べている。

いや、海軍では「自分」とは言わなかった。「私」です。「わた
し」じゃなくて上官に対して「わたくしは」と言う。同期生に
は「俺」ですけど。

しかし、海軍が「私」であつたために、「自分」が用いられない作
品があつたと言うわけではない。戦争文学として有名な大西巨人の
『神聖喜劇』^六を見てみると、「自分」という代名詞は全く見当た
らず、一人称として名前を名乗るようになっていいる。

「東堂は知らないであります。」

「お前はどうか？」と詰問した。相手はただちに「はい、谷村
二等兵、忘れました。」と公認の嘘を叫んだ。

四 阿川弘之。昭和一七（一九四二）年、海軍予備学生として佐世保
海兵団に入団。翌年軍令部特務班で暗号解読作業に携わる。一九（一
九四四）年、漢口の揚子江方面特別根拠地隊に転勤。

五 「座談会昭和文学史Ⅲ 志賀直哉―小説の神様の実像―」（『す
ばる』一九九七年七月号）。岡崎昌宏氏の御教示による。

六 一九四二年、対馬部隊本部控置部隊新砲廠第三内務班を背景とし
て描かれる。大西は、福岡・佐賀・長崎出身の補充兵役入隊兵して
いる。

ちなみに、このような一人称は、『機動戦士ガンダム』にも見られ、これも軍隊語の特徴として認められているのかもしれない。

「アムロ曹長！発進します！」

なお、二次大戦より前にはどのような軍隊語が使われていたのかは、未だ調査が進まず不明な点も多いが、日露戦争を描いた「肉弾七」では、「私」（読みは不明）が見える。

軍医殿、あの向ふに居るのは、私の部下であります。息が苦しうで、もはや駄目だと思ひますが、モ一度診てやつて下さい。

次は「であります」について検討しよう。

先に挙げた、『神聖喜劇』には、「であります」について面白い言及が見られる。

『カンジャ』とは、スパイのことですか。」

そう言ったとたんに私はその失敗に気づいた。せめて私は「…スパイのことではありませんか。」と「あります言葉」で問うべきであつたらうに、不覚にも「です言葉」を使つてしまったのである。

「なにい。『スパイのことですか？』『ですか』があるか。地方の言葉を使うようになったらん。『ありますか』と言え。」

ここからは、軍隊では必ず「であります」が使用されるといふことが読み取れる。しかし、実際資料に当たっていくと、必ずしも「であります」しか使わないという訳ではない。先に見た「山中放浪」では、「死ぬのは当然ですが」「犬死のような気がします」のように「です」「ます」体が使用されている。例を追加しておこう。

小隊長殿、天心へ行つてどうするんですか

「生きている兵隊」

「毎晩、ああやつて燃えてゐるのです」

「桜島」^八

これらも、「であります」に置き換えても問題ないが、「です」を使用している。特に「桜島」は、海軍を扱ったものであるが、「であります」は一例も見られず、これは、同様に海軍を舞台とする「雲の墓標」にも言えることである^九。

以上見てきたように、「自分」や「であります」は、役割語としてだけでなく、実際の軍隊においても使用されていたと思われるが、

役。

^八 梅崎春夫。昭和一九（一九四四）年、海軍に召集され、暗号特技兵として終戦まで九州の陸上基地を転々とする。

^九 姜錫祐「日韓における軍隊敬語の実態」（『待兼山論叢 日本学編』二十九、一九九五年）に「旧陸軍では「であります」体、旧海軍では「です・ます」体で話された」との指摘がある。

^七 桜井忠温。明治一二（一八七九）年六月一日、愛媛県に生まれる。陸軍士官学校卒業。松山の連隊旗手として日露戦争に参加。乃木將軍配下、旅順攻防戦で重傷を負う。大正一四（一九二五）年以降陸軍省新聞班長をつとめ、昭和五（一九三〇）年、陸軍少尉で退

それ以外の言葉も用いられていたことが分かる。では、なぜ、我々は、「軍隊語」と聞くと、「自分は……であります」のようなフレーズを思い浮かべるのだろうか。次には、「自分」や「であります」が国語史の中でどのように用いられているかを観察して考えてみよう。

三 「軍隊語」の起源

「自分」は、遠藤好英^{一〇}によると、中国の文献に見出されることはほとんどなく、日本で独自の展開を遂げたとされる。しかし、一人称の「自分」については、歴史資料において、あまり見かけるところはない。ここでは、近世に、武士言葉として使われていたのではないかということ指摘しておく。

「いや／＼騒ぎたまふな、自分は白絞伽羅之新と云ふ者なり」

「初音草斬大鑑（一六九八年刊）巻二・千早振神の油」

『……武士は相見互とやら、何分御容赦下されて。』と、詫ぶれど聞かず。

『イヤサ、これ、自分共も役目なれば、私づくで容赦ならぬ。』

「寢覚之繰言（一八二九、三〇年刊）巻八」

自分儀、兼々以佞奸を以山方助八郎を始、側両役へ謀計を示し、

一〇 『じぶん いじぶん じか じしん』講座日本語の語彙 語誌

II 『佐藤喜代治(編)、明治書院、一八五〇一八九二頁』

種々の讒奏を巧、国家騒動相謀候、数人為是犯重刑候儀、偏に自分返逆之企に……依て於草生津斬罪行ふ者也

「秋田治乱記実録（一八三四年写本）」

「寢覚之繰言」「初音草斬大鑑」から、「自分」を武士が使用していたらしいことが推測されるが、「自分」の実例自体が多く見出せず、また武士言葉の一人称としては「拙者」もあり、「自分」がどのような表現価値を持って使用されたのかは明らかでない。「秋田治乱記実録」に見える「自分儀」とは、「私のこと」といった意味かと考えられ、一人称代名詞と考えてよいか疑問である。

明治時代に入ると、「自分」は、白樺派などの小説に見られるが、これは、おそらく翻訳語としての一人称代名詞であり、軍隊語と分けて考えるべきだろう。参考までに二葉亭四迷の翻訳小説から例を挙げておく。

自分はいきなり飛び出さうとした。「静に！」姉に言はれて左様だツけど、静に玄関の方へ往ツて而してお雪という娘を見た。

「初恋」

武士言葉の「自分」がどのようにして軍隊語に取り入れられているのかは、明治時代の調査も不十分で、はっきりとは分からない。現代において、我々は、大相撲の力士や柔道家などのコメントにおいて、「自分」という一人称を聞くことができる。次の例は、Jリーグ鹿島の鈴木隆行選手のインタビューの一部である。

二 宝暦五（一七五五）年から七年のお家騒動が舞台

——サッカーでも、熱くなれていたんでしょ？

サッカーはずっと、いいことなかったですから。鹿島に入った頃も自分は試合に出られなくて、チームが優勝して盛り上がりつついても心から喜ばなかった。おとしフロンターレから鹿島に戻って、やっとレギュラーで優勝を経験できた。そのとき初めて思いました。サッカーでもこんなに熱くなれるのか、サッカーやっつててよかったなって。

『朝日新聞』二〇〇二年七月九日夕刊

いわゆる「体育会系」とまとめられることができるが、この「自分」の体育会系言葉としての定着はかなり進んでいるようである。

このように見てくると、「自分」は、二葉亭四迷、白樺派などの「自小説」を除いて考えると、武士、軍隊、体育会系という系列で用いられてきたということが出来る。これらに共通する特徴としては、規律の厳しさといったものが考えられる。規律の厳しさの最たるものが、ここで見てきた軍隊語であり、「自分」から軍隊語をイメージするのも、この語の特質上自然なこととも言えるのである。

最後に、「であります」について考えてみよう。

現代共通語の口頭語においては、文末辞として「であります」が使われることはほとんどなく、「ではありません」「でもあります」が「のように」、「は」「も」を伴い、否定や逆接で用いられるくらいである。では、「であります」が、軍隊語のように、平叙文の文末で使われることは、他になかったのだろうか。歴史資料を見てみると、幕末の江戸語において、遊女が「であります」を使用している。次

は「春色梅児誉美（一八三二・三三年刊）」からの引用である。

けふは稽古の帰りに姉さんの名代に、上千さまへ参るのでありますヨ
卷之三第六駒

それもあんまり馬鹿／＼しいと、実においらんの爲を思つて、何もかもぶちこわしてしまつたわけでありますヨ
卷之十二第二十三駒

古い時代に付いては分からないが、現代山口方言では、「であります」が高齢者によって用いられるとされている^{二〇}。

ソレオ ミルノガ ナカナカ オモシロエ モンデ アリマス
イ
それを 見るのが なかなか おもしろい ものですよ^{二一}

軍隊語の「であります」は、この山口方言から取られたという説もあり、その時、高杉晋作が奇兵隊で用いたとか、大村益次郎の創意によると言われるようである。しかし、これらの「であります」は、軍隊語の「であります」とはかなり異なる特徴を持っていることも事実である。その特徴とは、まず、遊女言葉は女性専用語であり、山口方言は女性も用いるということである。さらに、挙げした

二〇 平山輝男他編『現代日本語方言大辞典』明治書院、一九九三年。

二一 『全国方言資料 第5巻中国・四国編』日本放送協会編、一九六七年。女性、一八九六年生。

ように、これらでは、「ヨ」、「ネ」、「イ」など終助詞を付けて用いられていることである。軍隊語では、規律の厳しさが「であります」には現れていると言え、「でありますよ」のように、終助詞を付けて使用される例はまず見出せない。

男性が用い、終助詞を付けないという特徴が共通する「であります」としては、演説言葉、政治小説、論文の「であります」が挙げられる^{一四}。これらは、当然明治時代に入ってから見られるものなので、軍隊語と同様の表現であると思われる。次の一つ目は大隈重信による演説「憲政に於ける与論の勢力」の例で、二つ目は、嵯峨の屋おむろによる論文「平等論」である。

帝国議会は解散されました、今將に旬日の後に選挙が行はれて、今全国は選挙の競争が盛んに起つてをる時でありますんであります、此時に方つて、憲政に於ける与論の勢力を論ずるのは、最も必要なりと信じますんであります、

仰いで天を御覧なさい、蒼々として限りもなく、実に無辺無際であります。

現在となつては、軍隊語の「であります」が、山口方言から取ら

^{一四} 中村通夫『東京語の性格』（川田書房、一九四八年）に「この語（引用者注：「であります言葉」）はほゞ男性専用語と称してさしかえないということが第一にあげられると思う。近時女性の壇上に立つ機会も決して少なくはないが、その場合にも、「でございます言葉」が常識的に用いられているごとくである。」とある。もつとも、現在では、女性も演説で「であります」を使っているかもしれない。

れたのか、遊女言葉を受け継いだのかは実証しがたいが、少なくとも、演説言葉などで盛んに用いられた「であります」と軍隊言葉の「であります」はその発生を同じくしているだろうということは分かる。たとえこれらが、山口方言、遊女言葉を受け継いでいるとしても、そこには表現価値の大きな転換があり、また、この「であります」を受け入れた東京方言には、「である」も「ます」もあつたのだから、このような価値の違いから、新しい造語のように受け取ることも自然であつたと思われる。明治に入つて「であります」は価値の転換であれ、新造語であれ、新たな語彙として成立したのであり、軍隊語という役割語の「であります」を考へる時は、この明治以降に成立したものに焦点を当てるだけで十分であろう。

さて、現代において「であります」は、軍隊語のイメージ以外に、演説や警察の記者会見などで聞かれることがある。

それは、比較語彙論が主として「意味」というほぼグローバルなものを対象にして比べるからで、言語の系統は特に問題にならないからであります。^{一五}

このような「であります」に対して、「でございます」はややへりくだった印象を与えるため、軍隊語には見られないのかもしれない。いずれにしろ、明治以降新たな価値を持った「であります」は、軍隊、演説などを中心に硬い言葉としての用いられ方が定着して行つたと考えられる。

「自分」や「であります」は、その語彙としての特徴から、また

^{一五} 田島毓堂氏、国語学会平成十一年度秋季大会の講演より。

それらが日常語では聞かれぬという特異性から、軍隊語というイメージを持っている。これらに対し、「私」や「です」は日常でもよく使われ、我々はそれらを聞きなれている。たとえ軍隊で使用されていたとしても、軍隊語であることの目印には成りにくいのは、そのためだろう。実際に、「自分」「であります」は、軍隊でも使用されていたと思われる、また、軍隊以外で「私」や「僕」、また「です」「ます」を使っていた人が、軍隊に入ると「自分」「であります」を使う場面もあっただろうことを考えると、軍人が「自分」「であります」を使うというイメージは専ら過ちではないと考えられる。ただ、軍隊自体が、日常世界を離れて存在してしまうと、「私」「です」を排除してまで、軍隊（の全て）イコール「自分は：であります」というイメージが、陸軍海軍に関係なく定着する。これが役割語の一つの実態なのである。

使用文献

「一歩前進二歩退却」（『太宰治全集一〇』ちくま文庫）、「機動戦士ガンダムI」（『角川スニーカー文庫』一九八七年）、「平等論」「初恋」（『明治文学全集一七』）「光る風」（『ちくま文庫』）「呉淞クリーク」「山中放浪」「生きている兵隊」「遙拝隊長」「肉弾」「雲の墓標」「ある従軍部隊」「桜島」「兵隊」（『戦争文学全集』毎日新聞社、一九七一年・一九七二年）、「神聖喜劇」（光文社、一九八七年）、「座談会昭和文学史III 志賀直哉―小説の神様の実像―」（『すばる』一九九七年七月）、「憲政に於ける与論の勢力」（『大正期SP版レコード 芸能・歌詞・ことば全記録 五』）、「秋田治乱記実録」「天和聚訟記」（『列侯神秘録』国書刊行会、一九一四年）、「寢覚之繰言」

（人情本刊行会一一）「初音草嘶大鑑」（『滑稽文学全集第十一卷』）、「春色梅児誉美」（『日本古典文学大系』）

付記

本稿の内容は、一九九九年度の大阪大学大学院における金水敏教授のもとで行われた「国語学演習」での発表、及びレポートを基に構成したものである。その後、金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波書店、二〇〇三年）をはじめ、この分野に関して参照すべき重要な研究が公表されたが、当時の内容をほぼ変更することなく公開することにした。調査のきっかけを作っていた、金水敏先生、及び、この度報告書に掲載を許可いただいた蜂矢真郷先生に感謝申し上げます。また、成稿後、岡島昭浩先生から、デアリマスの成立に関して重要な論文（後藤剛「平田篤胤の「デアリマス」について」（『目白学園女子短期大学学術研究紀要』15、一九七八年）を教えていただいたが、本稿に取り入れることはできなかった。今後の調査に生かしていきたい。